

アーミッシュの伝統的農業の維持に関する研究

705-021 白 継華 指導教官 大河原眞美

A Study on Maintaining Traditional Agriculture by Amish

BAI Jihua

第I章. はじめ

アーミッシュは、スイス再洗礼派の流れをくむメノナイトから、17世紀末に分派して形成されたセクト的宗教集団であり、世俗のものを一切忌避するという宗教的理念をもっている。アメリカに移住していたアーミッシュは、独特な排他的共同社会の構築に成功し、それと共に、かつ居住していたヨーロッパのライン川上流地方の民族的農村文化を守り、18世紀の生活を維持し続けている。

アーミッシュのような独特な伝統的農業がここまで継続的に発展してきた理由については、宗教理念によるものか、社会システムによるものかなど、様々な見解がある。本論では、中国に居住しているタイ族の歴史、宗教、文化、生活、農業などを紹介して、アーミッシュとの比較しながら、アーミッシュが継続的に発展してきた理由を探る。

タイ族は、西双版纳タイ族自治州の水タイとジンポー族自治州の旱タイとに大きく分けられ、支系は117もある。これらの支系は言葉、文字、衣装の特徴が異なっている。タイ族には長い歴史があり、漢語の史籍ではタイ族の発展歴史について詳細に記載している。古い文献によると、貝葉経、タイ暦、長い叙事詩なども記載されるほど、タイ族の音楽、舞踊、民謡、民間説話などは周辺民族に広く影響を与えていた。

アーミッシュとタイ族は、共に少数派民族であるが、主流文化圏に対して、アーミッシュはアイデンティティを保っているのに対し、タイ族は保っていないという異なる結果が生じている。

アーミッシュの先行研究として、池田、坂井、大河原がある。池田の『アメリカ・アーミッシュの人びと』は、アーミッシュ社会・生活状況について分かりやすく紹介したものである。また、坂井の『アーミッシュ研究』は、アーミッシュの共同体を社会学と宗教学から分析している。大河原のアーミッシュ研究は、アーミッシュの三言語社会（標準ドイツ語、ペンシルバニア・ジャーマン、英語）の使用領域を扱った研究「アーミッシュの三言語変種使用社会」もあるが、そのほとんどは、アメ

リカ社会におけるアーミッシュの様々な裁判を扱った研究が多い。裁判の内容は、教育「A School Controversy :The Amish vs. American Educational Authorities: The Yoder Case」、馬車『裁判からみたアメリカ社会』、家庭内暴力（「The Samuel D. Hochstetler Case」「正義へのアクセス障害:アーミッシュの裁判からの事例」）と多岐に渡っていて、アメリカにおけるマイノリティと主流社会の軋轢を詳細に分析した。同時に、本稿の結論の一つである"外因"の議論に深い影響を与えた。本論の作成にあっては、これらの先行研究と農業関連の文献を参考にした。

本論は、アーミッシュを「内因」と「外因」から分析した。「内因」では、アーミッシュの伝統的持続可能な農業を、アーミッシュ共同体の歴史、宗教、言語、社会形態、農業から考察して微密な分析を行った。「外因」では、アメリカという国家や主流のアメリカ人の少数民族および宗教に対する政策や認識を取り上げた。具体的には、アメリカにおける宗教信仰の現状と、アーミッシュの裁判事件から信教の自由について論じている。アメリカでは国家的な宗教社会システム（構造）が存在していることが、アーミッシュの独特な宗教および彼らの伝統的農業の維持を可能ならしめた「外因」であることを明らかにした。

第Ⅱ章．アーミッシュの歴史

1525年に、ドイツのマルティン・ルター（Martin Luther 1483-1546）が宗教と政治権力と一体化されたローマ・カトリック教会の改革を提唱したことを契機に起きた宗教改革の流れの中で、急進的な改革派といわれるスイス兄弟団系は、成人の自由意識にもとづく信仰者としての洗礼を実効する思想を持つ再洗礼派を結成した。再洗礼派は、教会と国家との統合に支障すると指摘され、厳しい迫害を受けた。一方、平和主義を厳格的実践する再洗礼派の一部である、メノ・シモンズ（Menno Simons 1496-1561）が指導者として新しいグループ「メノナイト」（Mennonites）を作った。メノ・シモンズは再洗礼派主義の伝統を厳格的に守り、キリスト教義の純粋的な教会を創り、世俗社会の「忌避」と教義に違反した信者の除名追放を主張した。

1618年から1648年までの三十年戦争の頃、厳しい迫害にさらされた再洗礼派内部では、教義を巡る様々な論争が交わされた。この論争で最も注目されたのがスイスの再洗礼派の若き指導者で、後にアルザスへ移住し、そこでアーミッシュを興したヤコブ・アマン（Jacob Ammann 1656-1730?）の改革である。この論争を行った結果、アマンを代表とする厳格な教義実践する信者がメノナイトから分派して、アーミッシュという教派を形成した。ヨーロッパでの厳しい迫害の中で、1712年に、アーミッシュは、クェーカー教徒のイギリス人ウィリアム・ペンが信教の自由を保障した自身のアメリカの領地であるペンシルヴァニアに移住した。

第三章．アーミッシュの信仰生活

アーミッシュの宗教に対する信仰や厳しい教義は、彼らの日常生活に反映されている。

まず、アーミッシュの口頭言語は、ペンシルヴァニア・ダッチと呼ばれる古い南ドイツの古い方言をそのまま使っている。この口頭言語は現代のドイツ人には全く理解できないものである。礼拝の時にはハイジャーマンと言われる北部ドイツ語、今の標準のドイツ語に近いドイツ語を使用している。アーミッシュは、書記言語は、このハイジャーマンと英語を使っている。

次に、アーミッシュはバギーと呼ばれる馬車を交通手段として使っている。自分たちのコミュニティーを固く守りながら、強い団結の元で暮らしている。遠くへ行く場合は教会の許可が必要で、飛行機は認められない。また、アーミッシュは電気や自動車の所有も禁止されている。

17世紀から、ヨーロッパで厳しい弾圧と迫害に遭った再洗礼派は「無抵抗」と「非暴力」の理念を貫いて生き続けてきた。その理由は、この理念の中核に、「徹底的な愛の実践と無抵抗主義の貫徹」がある。アーミッシュの信仰生活は以下の5つの特徴がある。

1) 相互援助。アーミッシュの相互援助は彼らの教義から生まれた理念である。この相互援助という理念は、アーミッシュ社会において、困難と簡素の生活中に乗り越える非常に有効な手段でもある。

2) 社会追放（マイドウンク）。マイドウンク（Meidung）といわれる「社会的追放」について、大河原（1998）は次のように指摘している。

「アーミッシュにとって、教区を脱会することは教区の会衆とも縁を切ることなので、信仰生活だけでなく、社会生活でもこれまでの平和の暮らし、支えも一切失われるという厳しい罰を被るのである」（大河原,1998,P.114）。アーミッシュのマイドウンクは非常に厳しく、深刻で、制限範囲も広いことから、この制度はアーミッシュの特有な規律習慣である。

3) 簡素。「簡素」的な生活は様々な形で表れている。伝統的で簡素な服装は、世俗的社会との距離感を保ち、アーミッシュにとって非常に大切な教義の一つである。

4) 無抵抗的な平和主義。アーミッシュは「無抵抗」的な平和主義の宗教信仰を貫いている。この平和主義は、彼らが国家に対する忠誠を誓うことさえ拒否している。彼らにとって、殺すか殺されるかの二つ選択がある場合、殺される側を選び、殺してしまえば恨みの連鎖があり、不信感の連鎖になる。さらに、自分たちの敵であっても助けなければならない時は助ける。

5) 聖餐、洗足、成人洗礼。アーミッシュ分裂要因の一つであるといわれる、聖餐式の年に二回行うことや、キリストの弟子が足を洗ったことに由来する洗足式の維持は、アーミッシュにとって、重要な宗教的儀式である。アーミッシュは成人洗礼（自分の意志で教義を判断できる年齢になると洗礼する）を行っている。

信仰は、アーミッシュ社会の生産や生活方式に重大な影響を及ぼし、アーミッシュにとって、宗

教への信仰は、生活に唯一不変の原則である。言い換えれば、アーミッシュ社会における彼ら独自の宗教への信仰と、宗教的行動を自律的に守ってきたことが、彼らのこれまでの発展の「内因」である。

第IV章． アメリカの宗教性

ヨーロッパに残ったアーミッシュは、1937年に他宗派に改宗することにより消滅した。一方、アメリカに移住したアーミッシュは、移民当初の500人から、現在では15万人に至っている。このアメリカの宗教の特質について以下の三点から検証する。

まず、アメリカの信教の自由は、1766年のヴァージニア権利章典の中に、「宗教、あるいは創造主に対する礼拝およびその様式は、武力や暴力によってではなく、ただ理性と信念によってのみ指示されうるものである。それゆえ、すべて人は良心の命ずるところにしたがって、自由に宗教を信仰する平等の権利を有する。お互いに、他に対してはキリスト教的忍耐、愛情および慈悲を果たすことはすべての人の義務である」と記して保障している。アメリカのフロンティアの存在は、宗教的弾圧を受けた人々が、自分たちの信仰を保持していくことを可能にする「空間」を提供し、アメリカは自由と平等な思想に基づいて、信仰の多様性の内容性を保障している。

次に、アメリカの信教の自由の保障について、1791年、独立まもないアメリカ憲法修正の第1条において、人類史上はじめて、政教分離を憲法に規定した。

アメリカは法的に、宗教の多様性と自由を保障している。アメリカの憲法に政教分離が規定され、宗教的多様性の法的保証が明らかにされている。

最後に、2001年12月のギャラップ世論調査によれば、アメリカの宗教人口比率は、プロテスタント55%、カトリック26%、ユダヤ教3%、モルモン教2%、正教1%、その他の宗教3%、無宗教7%である。プロテスタントからギリシャ正教までを合計した87%は「ユダヤ・キリスト教的伝統」をくむ教派のまとまりである。アーミッシュは、最大グループのプロテスタントに属する宗教集団である。

以上の三点から、アメリカの宗教の中核は多様性を保障し、宗教を信じることにより、アメリカという国をまとめていく独自の宗教を見いだすことができる。ヨーロッパに残ったアーミッシュは、消滅したが、アメリカに移住したアーミッシュが存続し発展しているのは、アメリカという国家の宗教性によるものである。信教の自由の保障は、アメリカという国家のテーマであり、多様性からなる国家のために、信教の自由を標語に、異質なものを含むという包容力があると考えられる。

第V章． アーミツツの農業の概観

アーミッシュの歴史からアーミッシュの農業を見ると、彼らのヨーロッパで体験した残酷な迫害

の歴史と深く関係があることがわかる。さらに、彼らの宗教の信仰により、持続可能な農業を続けていたと言える。

誕生した 1693 年当時のアーミッシュは、アルザス、パラティネイト地方、そしてスイスに散在するごく少数の集団であった。大河原（1998）は、「アーミッシュは厳しい迫害、弾圧をうけた。見つかると殺されるので、農村に逃れて農業を初めた。ヨーロッパでユダヤ人が土地の所有を禁止されて都市生活を余儀なくされたのと逆に、アーミッシュは迫害で農村生活を強いられた」（大河原,1998,P.109）と当時の状況を呈している。

アーミッシュには何百年前のヨーロッパ先祖から伝わってきた伝統的な農業が引き継がれ、高い農業水準を持っていた。今アメリカに定住しているアーミッシュの農業も当時と変わらず、高水準を保っている。アーミッシュは圧倒的に農民である。というより、農民であることが、アーミッシュの教会員としての必要条件と言っても過言ではない。アーミッシュは、農業及び一部農業と関連した職種のみを認め、都市部での企業商社、政府行政機関、官公庁での労働をきびしく禁じている。アーミッシュの農業の特徴を 4 つの側面から分析する。

1) 長時間・重労働。アーミッシュは「農業に献身し、そこで成功をおさめることが、アーミッシュにとって神に嘉みせられる唯一無二の道なのであり、この経済的業積を通してかれらの宗教信仰の正当性を立証」（坂井,1977,P.420）となっている。農作業により、勤勉さと長時間・重労働にも耐える強く意志を生み出すである。

2) 持続可能な農業。アーミッシュは、農地では馬で耕作しなければならないことが教義である。トラクターなど高性能の大型農業機械の使用も禁じている。現在のアーミッシュで用いている農具は全く旧式のヨーロッパ式の農具であり、かれらの耕作する農場規模は馬耕で充分できる程度のものである上に、馬耕はトラクターに比して深耕が可能であり、土壌のためにも好都合である。

3) 有機農業。アーミッシュの農業は、市販の化学肥料を全く使用しないというわけではないが、自家製の堆肥肥料を大量に投入し、それをいちじるしく重用していることである。アーミッシュは、農業が豊かな施肥によってのみ達成される基本的信念をもっている。自己の農場に多量の堆肥肥料を投入して、肥沃な状態に保っている農民は尊敬される。

便利な化学肥料と比較して、有機肥料の取扱いは面倒であっても、有機質の堆肥肥料が土壌のみならず農作物にとっても有益である。アーミッシュが「伝統である」というように、旧大陸時代における土壌改良法の伝統が今日までそのまま維持されている。アーミッシュは、よき農業は豊かな施肥によってのみ達成できるという基本的信念をもっている。

4) 小規模、家族化。アーミッシュの農場規模は、粗放的機械化農業を採用することなく、馬耕、農業経営の多角性と集約性、そして家族労働といったアーミッシュ農業の特性との関連が深い。アメリカの平均 200 エーカーと比較すると、アーミッシュの平均 50 エーカーには確かに小規模である。アーミッシュは、トラクターなど高性能の大型農業機械の使用を禁じているので、他のアメリカ農民のような広大な規模の農場経営は不可能なのである。

第VI章． 考察

本論では、アーミッシュとタイ族の両民族を比較して、アーミッシュが持続可能な伝統的農業の維持してきた理由を明らかにした。

宗教はアーミッシュ社会の生産や生活方式に多大な影響を与え、アーミッシュにとって、宗教への信仰は、生活に唯一不変の原則である。宗教への信仰は、アーミッシュが保持する持続可能な伝統的農業の維持、継続に重要な役割を果たしたと考えられる。言い換えれば、アーミッシュ社会における自分独自の宗教への信仰と、宗教的行動を自覚的に守ってきたことが、アーミッシュの持続性のある農業の発展の「内因」であると言える。

また、発祥地であるヨーロッパのアーミッシュは、残酷な迫害を受け、すべて改宗して現在は存在しない。一方、迫害を避けて、アメリカに移民したアーミッシュは、宗教信仰の自由を保障されたアメリカで、生き残り発展し続けている。このことから、アーミッシュがアメリカで生き残ったことと、アーミッシュが持続可能な農業を続けられたことは、まさにアメリカ社会の宗教信仰の自由によるものだと思われる。アメリカ社会の宗教信仰の自由が、アーミッシュの社会を存続させた「外因」であると考えられる。即ち、アメリカの信仰自由保障があったからこそ、アーミッシュの伝統的農業が維持できたのである。

「内因」と「外因」の相互誘引により、独特なアーミッシュの宗教社会が、持続可能な伝統的農業を維持を通して存続してきたと考えられる。

今日、先進資本主義国でも化学肥料、農薬等の多投入について見直しの機運がある。20世紀型の増産技術から持続可能な環境保全型技術への転換の流れがある。アメリカでは機械と化学肥料、農薬を使用した効率的な農業経営が行われているが、有機農業、環境保全型農業の先進地でもある。日本においても環境保全などの持続可能な農業の取組が推進されており、環境直接支払制度や、有機認証などの持続可能な農業政策が行われている。

以上の点を踏まえて、今後は、アーミッシュの農業文化、子供の教育、そして小規模環境保全型農業と地域文化、農業担い手の養成、そして大規模的環境保全型農業を対照しながら、持続可能な農業経営の存立条件と、地域政策的な支援に関する今後の課題の研究をさらに進めていきたい。

参考文献：

- 池田智『アメリカ・アーミッシュの人びと』明石書店、1999年。
五十嵐武士・油井大三郎編『アメリカ研究入門』東京大学出版会、2003年。
John A.Hostetler, Amish Society, the United States of American, The Johns Hopkins University Press,1980。
関西学院大学アメリカ研究会『さまざまのアメリカ』啓文社、1994年。
森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』講談社、1996年。
大河原真美『裁判からみたアメリカ社会』明石書店、1998年。
王珂『多民族国家 中国』岩波新書、2005年。
坂井信生『アーミッシュ研究』教文館、1977年。
Steven Nolt, A history of the Amish, Good Books, 1992。